

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六ノ十八ノ二演舞場B二
電話 三五四一―五四七一番

清元協会

世田谷区桜ヶ丘四ノ九ノ十八
電話 三七〇六―九五二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話 三五七一―〇二一六番

新内協会

新宿区大久保二ノ二三ノ二
電話 三三〇〇―四六五三番

常磐津協会

相模原市相模大野二ノ十九ノ六
電話 〇四二七―四三二〇二七

社団法人 長唄協会

中央区銀座二ノ十一ノ十九ノ四
電話 三五四二―六五六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二ノ十五ノ十二ノ四〇三
電話 三五八五―九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

平成六年三月十二日(土)

朝日生命ホール

第一部 正午開演
第二部 午後四時開演

三時半終演
七時半終演

'94 都民芸術フェスティバル

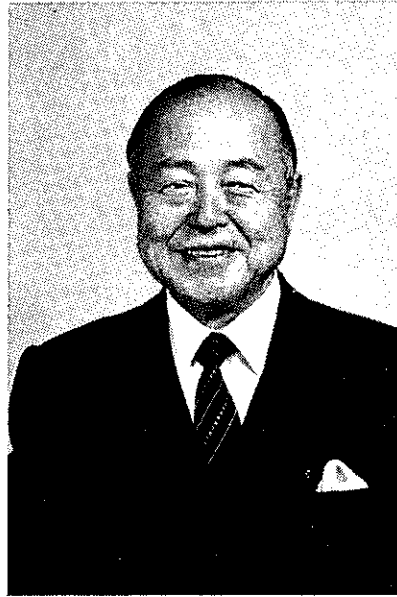
第二十四回 邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'94都民芸術フェスティバル公演計画一覧

分野	種目	演 目	期 日 ・ 会 場	入 場 無 料	問 い 合 せ 先	
音	オ	ブッチーニ作曲「蝶々夫人」 (藤原歌劇団)	2/26・3/1・3/3 東京文化会館大ホール	20,000～2,000円	(財)日本オペラ振興会 ☎3225-9633	
	ペ	ベートーヴェン作曲「フィデリオ」 (二期会)	2/17・2/18・2/19 東京文化会館大ホール	12,000～2,000円	(財)二期会オペラ振興会 ☎3796-4711	
	ラ	ロッシーニ作曲「アルジェのイタリヤ女」 (東京室内歌劇団)	3/20・3/21 (2公演) セッション杉並	5,000円	東京室内歌劇場 ☎3350-5926	
楽	オーケストラ	オーケストラ・シリーズ No25	1/14・1/26 2/4・2/7・2/12・2/183/3・3/12・3/27 東京芸術劇場大ホール	3,500～1,000円 A席9公演分 セット券 25,000円	(社)日本演奏連盟 ☎3437-6837	
	ポピュラー	懐かしのラテン名曲集	2/25 よみうりホール	2,500円	(社)日本音楽家協会 ☎3585-3903	
		シャンソン ハイライト'94	3/4 よみうりホール			
		スタンダードをあなたに～ジャズ～	3/11 よみうりホール			
邦楽	第24回邦楽演奏会	3/12 新宿朝日生命ホール	1,500円	日本三曲協会 ☎3585-9916		
演	新	ベケット作・鴻上尚史翻安・演出 「ゴドーを待ちながら」	3/24～3/31 東京芸術劇場中ホール	3,500～4,500円	サードステージ ☎5485-1272 (社)日本劇団協議会 ☎3341-8151	
	劇	草鹿宏作・小松幹生脚本・野部晴夫演出 「翔べ、イカロスの翼」	1/17～1/22 都市センターホール他2会場	定時制高校生貸切	劇団東演 ☎3419-2871	
	児		「おっとと おととと 音あそび」	2/6～2/7 武蔵野芸術劇場他7会場	当 1,800円 前 1,500円 団 1,200円	日本児童・青少年演劇 劇団協議会 ☎5376-3671 参加団体15団体 当→当日 前→前売り 団→団体 学→学生
			「風の又三郎」	2/3～2/11 プレヒトの芝居小屋他1会場	当 3,605円 前 3,090円 学 2,575円	
	童		「でこぼこひよろりん」	3/21～3/27 東京芸術劇場小ホール他3会場	当 3,000円 前 2,500円	
劇		リーダーズ・シアター 「お話がいっぱい」Part II	2/2～3/31 荒川区日暮里サニーホール他8会場	当 1,800円 前 1,500円 団 1,300円		
		グリム リムグ? ムグ?? 呪文ではじまる グ ムの話、知っているはずのグリムの話が……	2/5～3/19 東久留米市中央公民館他6会場	当 2,300円 前 2,000円 団 1,500円		
舞	バレエ	「ジゼル」	1/21・1/22・1/23 東京文化会館大ホール	10,000～2,000円 無料招待あり (中・高校生に限る)	(社)日本バレエ協会 ☎3462-5524	
		スターダンサーズ・バレエ団 「近代バレエ傑作集」	1/26・1/27・1/28 ゆうぼうと 簡易保険ホール	7,000～3,000円	スターダンサーズ・バレエ団 ☎3401-2293	
		東京シティアレエ団 「シンデレラ」	3/25・3/26・3/27 東京文化会館大ホール	8,000～3,000円	日本コンサート協会 ☎5474-2861	
踊	現代舞踊	「風の彩譜 II」 「コスモス-COSMOS-」 「ジ・アビス (深淵)」	1/29・1/30 東京文化会館大ホール	8,000～3,000円 無料招待あり	(社)現代舞踊協会 ☎3400-4544	
	日本舞踊	第37回 日本舞踊協会公演	2/15・2/16・2/17 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(社)日本舞踊協会 ☎3533-6455	
古典芸術	能	能および狂言 都民能3番 式能10番	1/29 2/20 国立能楽堂	3,000円 6,000円	(社)能楽協会 ☎3574-6441	
	民俗芸能	第25回 東京都民俗芸能大会	3/5・3/6 東京芸術劇場中ホール	無料招待	東京都民族芸能大会実行委員会 ☎3576-8630	
	寄席芸能	第24回 都民寄席	2/5～3/4 八王子市民会館他7会場	無料招待	都民寄席実行委員会 ☎3365-0874	

'94 都民芸術フェスティバルに寄せて



東京都知事 鈴木 俊一

今年もまた、ファンの皆様が心待ちにしている「都民芸術フェスティバル」のシーズンとなりました。この催しは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へをキャッチフレーズに、東京都が芸術文化団体の公演を助成することにより、都民の皆様にも、最高の舞台芸術を鑑賞していただくことと、都民の皆様への御支持と出演者の方々の意欲的な取り組みに支えられ、東京の初春を飾る多彩な文化行事として、今回で26回目を迎えることができました。都知事の私といたしましては、大変喜ばしく存じます。

東京都制施行50周年に当たる昨年は、記念オーケストラ作品の募集と都民コンサートの実施、都民の歌の制作などの様な事業を展開いたしました。これら記念事業には、都民はもとより、外国からも多数のご参加をいただき、芸術文化分野における国際化の進展に、一段と大きく寄与したところです。

私は、引続き、都民の皆様が身近に芸術活動を楽しむことができるよう、環境の整備を積極的に進めるとともに、この「都民芸術フェスティバル」をはじめとする文化事業の充実、発展に努めてまいります。

このフェスティバルに参加され、東京都の芸術文化の振興にご協力いただいている邦楽連合会の皆様にも、厚くお礼を申し上げますとともに、今後ますますのご活躍を期待する次第です。

○これからの個々の公演の詳細に関するお問い合わせは、各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたるお問い合わせは、東京都教育庁生涯学習部文化課(電話 ダイヤルイン 5320-6861)へお願いします。

第一部 番 組 (正午開演)

一、三曲 楓かえで

の 花はな

箏高音

尺 八
川 川 知 近 大 白 佐 川
瀬 瀬 野 藤 坪 石 藤 瀬
庸 順 希 恵 正 昌 阜 白
輔 輔 秋 秋 秋 秋 秋 秋

箏低音

村 高 山 鈴 清
山 橋 崎 木 水
朋 翠 扇 操 芳
秋 秋 秋 秋 秋

二、萩 江 鐘かね

の 岬みさき

同 同 唄
萩 萩 萩
江 江 江
丸 佐 ひて
子 記 子

同 同 三味線
萩 萩 萩
江 江 江
ゆ ふ せん
う 子 く 子

三、義太夫 艶容女舞衣 (酒屋の段)

浄瑠璃 竹本越道
三味線 鶴澤友路

四、新内明あけがらす 烏夢泡雪ゆめのあわゆき (雪責)ゆきせめ

浄瑠璃 富士松 鶴千代

三味線 新内誠十郎
上調子 鶴賀伊勢一郎

五、常磐津 忍夜恋曲者 (将門)

浄瑠璃 常磐津 文字香代
同 常磐津 文字増十
同 常磐津 文字由喜
三味線 常磐津 菊光
同 常磐津 文字孝代
上調子 常磐津 清之

六、清元 今様須磨の写絵 (須磨)

浄瑠璃 清元 延栄喜美
同 清元 延栄一
同 清元 延正路
同 清元 延清恵
三味線 清元 延栄美代
同 清元 延八寿美
同 清元 延美弥

七、長唄 教草吉原雀 (吉原雀)

唄 今藤文子
同 今藤美知
同 今藤郁子
同 稀音家 六能栄
三味線 今藤長十郎
同 伊勢弥生
同 今藤苗紫野
同 杵屋三澄

雛子

笛 鳳声 晴郷
小鼓 望月 慎一
小鼓 藤舍 清成
小鼓 藤舍 呂船
大鼓 藤舍 円秀

第二部 番 組 (午後四時開演)

一、三曲 砧きぬた 巢す 籠ごもり

青木鈴慕 作曲

尺八 青木 青木 彰 鈴慕
 横田 青木 彰 鈴慕
 林田 鈴 鈴 琥 時
 片岡 静 鈴 麟
 佐野 奈三 江
 上條 妙子
 福田 千栄子
 青木 麻衣子
 箏 三 絃

二、宮 菌 鳥とり 辺べ 山やま

浄瑠璃 宮 菌 千和 惠
 同 宮 菌 千よし 惠
 同 宮 菌 千雪 惠
 三味線 宮 菌 千加 波

三、義太夫 関せき 取とり 千せんり 両りょう 幟のぼり (猪名川内の段)

おとわ 竹 本 朝 重 駒之助
 猪名川 竹 本 朝 重 駒之助
 鉄が嶽 竹 本 素 八
 大坂屋 竹 本 佳之助
 呼出し 竹 本 駒 輝
 三味線 豊 澤 源 平
 胡弓 豊 澤 幸 治

四、清元復新三組盃（傀儡師）

浄瑠璃 清元 志寿子太夫
同 清元 志寿雄太夫
同 清元 清榮太夫
三味線 清元 美多郎
同 清元 邦寿
上調子 清元 美三郎

五、新内梅雨衣醉月情話（花井お梅）

浄瑠璃 新内 光翁太夫
同 新内 光吉太夫
三味線 新内 勝一郎
上調子 鶴賀 伊勢一郎

六、常磐津戾（もどり）

橋（はし）

浄瑠璃 常磐津 八重太夫
同 常磐津 光勢太夫
同 常磐津 和光太夫
同 常磐津 仲重太夫
三味線 常磐津 東蔵
同 常磐津 啓寿郎
上調子 常磐津 東吾郎

七、長明京鹿子娘道成寺（娘道成寺）

唄 柏山 庄太郎
同 和歌山 富司郎
同 柏山 庄六
同 和歌山 富朗
同 松島 藤次郎
三味線 杵屋 三朗
同 杵屋 三朗
同 杵屋 四郎
同 杵屋 四郎
同 杵屋 三郎

囃子

笛 鳳声 晴雄
小鼓 望月 太津之
小鼓 望月 朴清
大鼓 望月 喜三郎
太鼓 望月 左太郎

曲目解説(演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、三曲 楓の花

尾崎六夫作詞、明治三十年ごろ京都の松坂春栄作曲。嵐山を中心にその周辺の初夏の風景を述べたもの。題名は歌詞の中に「散るは楓の花ならん」とあるのからとった。純箏曲として作られた明治新曲のひとつで、箏の高低二重奏に尺八の連続音がからみ縫ってゆくという、全体が華やかな曲風となっている。

二、萩江鐘の岬

長唄の「京鹿子娘道成寺」を演じて、大好評を博した初世中村富十郎は、同じものを上方へ帰って宝暦九年(一七五九)大阪中山座で「九州釣鐘岬」の大切に「江戸鹿子娘道成寺」の外題で演じた。それが「鐘が岬」の題で、地歌に伝承されたが、幕末のころ、萩江節で取り入れて、題も「鐘の岬」とした。

したがって、歌詞は「京鹿子娘道成寺」の前の部分と同じであるが、萩江節に移すときに調絃を少し変えたので、江戸風になっている。しかし、唄い方は地歌風でもいいという伝承もあり、また思いきって個性的であっていいという口伝もある。「京鹿子道成寺」の歌詞と解説を参照されたい。

三、義太夫艶容女舞衣(酒屋の段)

安永元年(一七七二)十二月、大阪豊竹座初演。竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七の合作。

この話のもとになった事件は、元禄八年(一六九五)十二月六日大阪長町美濃屋平左衛門の養女三勝と、大和五条新町の赤根屋(茜屋)半七とが千日墓地で心中したことといわれる。歌舞伎ですぐこれを脚色して「茜の色揚」の題で上演して大当りをとった。浄瑠璃ではのち紀海音が「笠屋三勝廿五年忌」を書いた。さらに「女舞剣紅楓」「増補女舞剣紅楓」が書かれたが、それらを集大成したのがこの曲。上中下三巻の構成で、そのうち下の上塩町の段が、今日演奏される有名なところ。通称「酒屋」の名で知られている。お園が一人物思いにふけるところである。

茜屋の半七は、お園という女房がありながら、美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人の間にはお通という子までいる。ふとした廓のいきさつで、半七は人殺しの科人になってしまふ。半七の父半兵衛は、勘当した息子ながらふびんに思い、代官所へいつてわが子の罪を引受け、繩にかかった。お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、いったんはお園を実家へ連れ帰ったが、この話をきいて自分を恥ずかしく思い、お園を連れて詫びにくる。お園は、夫に嫌われるのは私の至らぬためと、悲しいあきらめのうちに、半七の身を案ずるのである。

今日は時間の都合で、お園のクドキまで。このあと死を覚悟した半七と三勝が、お通を捨てて様子をうかがう。内では宗岸親子、半兵衛夫婦が、お通の守り袋から出た書置を読み、悲嘆の涙にくれる。軒先の半七と三勝はよそながら最後の暇乞いをして、死に行く。

四、新内明烏夢泡雪(雪責)

初代鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永元年(一七七二)にはできていたらしい。ふつう上下にわけ、上を「浦里部屋」、下を「雪責め」という。「蘭蝶」「伊太八」とならぶ新内節の代表曲。

春日屋時次郎は、山名屋の浦里となじみを重ね、借金で首が回らなくなったので、もう死ぬよりはかはなくなった。今日もその相談と、時次郎は内緒で浦里の部屋に忍んでいたが、遣り手のかやに見つけられ、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎はさんざんに叩かれた上、若い衆に表へ放り出されてしまふ(こまでが上)。

雪の降りしきる山名屋の中庭、浦里と禿のみどりは古木に縛られて、亭主の折檻を受けている。亭主はお前のためだから、あの時次郎と別れたほうがいいというが、浦里はあきらめられない。やがて隣の二階座敷から、三下りのメリヤスが聞こえてくる。浦里はみどりを、みどりは浦里をいたわり案じる。その心根はまことに哀れである(今日の演奏はこまで)。このあと、屋根伝いに時次郎が忍んできて、二人の繩を切り、助けるところまで。

降る雪、松の古木、赤い衣装の遊女と禿、まことに絵のような場面での責め折檻。あとで助けられるので救いがある。

五、常磐津 夜恋曲者(将門)

天保七年(一八三六)七月、江戸市村座で上演された「世善知鳥相馬旧殿」の一番目六立目の大詰に出された浄瑠璃所作事。別名「忍夜孝事寄」。常磐津としては「関の扉」とならぶ有名曲である。

宝田寿助作詞、四世岸沢式佐作曲。

平将門が討伐された後の話。下総の猿島にある相馬の古御所は、将門がその威勢を誇っていたころは、東内裏と称していた。今は廢墟となったその古御所に、将門の殘党を追ってきた大宅太郎光圀、(源頼信の家臣)が、そこで傾城姿の滝夜叉姫に逢う。将門の忘れ形見の姫は、島原の傾城如月となつて色仕掛けで光圀を味方につけようとする。光圀はそれを適当にあしらい、東内裏の思い出話をそらし、驕奢の生活から、将門が討伐されるまでを物語る。それをきいて齒をくいしばって泣く如月。迫る光圀をはぐらかした如月は、廓話になり、そこで相馬錦の旗を落とすのをきっかけに、見あらわしになる。滝夜叉姫は蝦蟇の妖術で光圀を悩ますという筋。

話に変化があり、きかせどころの多い曲。歌舞伎でもたびたび上演される名曲である。

六、清元今様須磨の写絵（須磨）

主人公の名から「松風村雨」とも。二世桜田治助作詞、清沢万吉（のち初世清元齋兵衛）作曲。文化十二年（一八一五）五月、江戸市村座で初演された。能の「松風」を題材とした、いわゆる「松風もの」の一つだが、能にはない此兵衛という人物を登場させているのが特色。上下二段に構状された大曲である。

勅勘を受け、須磨に流されていた在原行平は、ところの海女松風と村雨の姉妹となじみを重ねた。今日も姉と妹は行平をめぐって小さな争いになったが、行平のとりなしで仲直りする。二人を先に庵へやった行平だが、実はもう許しがあつて、これから船に乗って都へ帰るところである。名残りは尽きないが時間がない。記念に烏帽子狩衣を残し、いずれ時を得て迎いをよこそうと行って、行平は船に乗る（ここまでが上の巻）。残された二人は、松にかかる烏帽子と狩衣、それに添えた和歌を見つけて、行平の去ったことを知る。跡を追おうとするところへ、奴の此兵衛が出て、行平はとっくにいなくなつたというので松風は気を失う。邪魔をする此兵衛を振りきって、村雨はあとを追って行く。此兵衛に呼ばれて気がついた松風は、形見の狩衣を抱いて恨みごと。それを此兵衛が口説くが、そんな言葉には耳もかさず、女の一念で追いついてみせると、狂気のようにもだえるという話。

清元としては珍しく独立した一幕の舞踊劇で、完成度の高い作品である。今日は時間の都合で省略して演奏される。

七、長唄教草吉原雀（吉原雀）

初世桜田治助作詞、初世富士田吉治・初世杵屋作十郎作曲。明和五年（一七六八）十一月、江戸市村座の「男山弓勢競」二番目大切に初演された。もとの狂言の筋がはっきりしないので、この長唄の筋もよくわからない。たぶん、八幡太郎義家が危なくなつたとき、鷹の精が助けるといふことで、その連想から放生会に結びつけ、さらに江戸吉原のいろいろを教える、ということにしたものらしい。題名についても、鳥のありかを教えることなのか、鳥を遊女になぞらえて、その遊び方を教えることなのかわからない。また吉原雀というのはヨシキリの別名とも、おしゃべりな人のことともいう。吉原へ出かけるのでも、いろいろある。急ぐ人は船頭を二人、三人と仕立てる。初心な客は見ればかり。馴れた客が上がると、刀や編笠を預かって、二階の座敷へ通される。手管でそばを離れない時には、こちらも洒落て悪口をいう。そんなことをいつていると、もう朝になり、帰らなければ。手紙を出すから、その時にはどうぞまた来て下さいという。そうしたやりとりの面白さは、粋な者でなければわからないでしょう。

現在では、意味のわからないところがあるが、曲は名曲。古い江戸時代の吉原が、なんとなく浮かんでくるようである。

第二部

一、三曲砧 巢籠

砧の音も冴えて、晩秋から寒籠りの季節となります。新春嚴寒の中から鶴の巢籠り、そして子育て、巢立ちへと明るい春がやってきます。
曲は後半、巢籠り地の手を入れて賑やかに終わります。（青木鈴慕）

二、宮 菌 鳥 辺 山

明和六年（一七六九）刊の「宮菌花扇子」に収められているから、それまでには成立していた。宮菌鸞鳳軒作詞・作曲。もともと鳥辺山における心中事件は、おまん源五兵衛、あるいはお染半九郎で知られていた。地歌では、近松門左衛門作詞、湖出金四郎作曲の「鳥辺山」があり、これはお染半九郎であった。明和三年、近松半二が義太夫節「太平記忠臣講釈」を書いた時、その五段目「道行人目の重縫」で、塩谷判官の弟縫之助と傾城浮橋とが、酒席で鳥辺山心中をまねて遊ぶという場面を作った。それを春富士正伝がそのまま自分の語り物にしていたが、さらにそれを鸞鳳軒が改作、編曲したものらしい。

宮菌節の代表曲で、浮橋と縫之助の二人が、鳥辺山へ心中に行くという道行の場面。名文、名曲で、傑作の名に恥じない。今日は時間の都合で、一部を省略して演奏される。

三、義太夫 関取 千両 幟（猪名川内の段）

明和四年（一七六七）八月、大阪竹本座初演。近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛の合作。

当時大阪で人気のあった相撲の力士、池田の岩川と天満の千田川をモデルに、「双蝶々曲輪日記」の濡髪長五郎と放駒長吉の立て引きを翻案して、九段続きにしたもの。

人気力士猪名川は、恩を受けた鶴屋の若旦那那礼三郎のために、その愛人錦木太夫の身請金二百両を作らなければならぬ。一方、錦木に横恋慕している一原九平太は、猪名川の競争相手鉄が嶽を使って身請しようとする。今日中に二百両ができなければ、錦木は九平太にとられてしまう。そのぎりぎりの日、鉄が嶽が連れ立って猪名川の家へ来るところから、猪名川が錦木の身請を延期してくれるように鉄が嶽に頼むが、鉄が嶽は先日九平太が恵海庵で猪名川にひどい目にあわされた仕返しを頼まれていると聞いて、さんざんに踏みさいなむ。そして魚心あれば水心と聞いて、今度の取り組では勝を譲るように匂わせて去る。猪名川は八百長で負ける覚悟で土俵へ向かう。それと悟った女房は、夫の大事と跡を追うまで。

このあと女房が自分の身を売って二百両の金を作り、猪名川の顔も立ち、錦木を請け出す。さらに筋は複雑に展開するが、たいていここだけが演奏される。

四、清元 復新 三組 盃（傀儡師）

二世桜田治助作詞、初世清元齋兵衛作曲。文政七年（一八二四）九月、江戸市村座で、三世坂東三

津五郎が踊った三変化の舞踊劇のうち。ほかは「傾城」「大山参り」で、ともに長唄であった。題名は三津五郎、その紋の三つ大、三変化にちなみ、また初演した延寿太夫が延寿齋と改名するのをきかせてある。

傀儡師というのは、日本に古くからいた人形使いのことで、「くぐつ」とか「くぐつまわし」といわれた。箱から小さな人形を取り出し、手で使いながら伴奏なしに、物語を歌ったり語ったりした。それを舞踊化したもの。前に河東節、後に長唄の同名曲がある。

傀儡師が出て、人形を使う。はじめはやさしい唄だったが、子宝の話になると、八百屋お七が登場、それがユーモラスな節で語られる。続いて浄瑠璃姫と牛若丸のロマンスになり、がらりと変わって舟弁慶になる。人形を入れた箱が鳥籠になったので、傀儡師は雀を追っていなくなったという筋。当時流行の唄があったり、洒落があったりして、楽しい曲になっている。

五、新内 梅雨衣酔月情話（花井お梅）

明治二十一年（一八八八）三月、五世富士松加賀太夫作詞・作曲。前年六月九日、日本橋浜町酔月楼の女主人花井お梅が、番頭の峰吉を刺し殺した事件は、たいへんな評判となり、そのあらまは、『東京絵入新聞』に「花井於梅酔月奇聞」として連載された。その記事をもとに脚色・作曲したもの。話題の事件をもとにしているが、主人公の悩みやあわれさがよく出ている上に作曲にすぐれ、また明治時代らしい匂いもあって、よく演奏される。

お梅は千葉県佐倉の下級藩士の娘に生れたが、八歳のころ東京の岡田家の養女となり、実家とは縁が切れた。のち柳橋から芸者になったが、二十歳のとき、落ちぶれていた実父にめぐり逢い、養家か

ら離籍して花井姓にもどり、両親や兄妹の面倒を見ることになる。その後、芸者として浮き名を流したが、そのとき知り合った役者の男衆峰吉を、自分のところへ引き取った。やがてお金を出す人があって、日本橋浜町に酔月楼を始めたが、信用がなく、店の名義は父のものであった。そこで父娘の対立がはじまり、また番頭として働く峰吉をも誤解して、店を乗っ取られるのではないかと疑心暗鬼になり、結局峰吉を殺すことになる。

明治維新という変化の時代に、運命にもあそばされた女性、という目でみれば、お梅も同情すべき女性の一人であった。

六、常磐津 戻 橋

本名題「戻橋恋の角文字」。河竹黙阿弥作詞、六世岸沢式佐作曲。明治二十三年（一八九〇）十月、東京歌舞伎座で初演された。明治時代に作曲された作品としては、今日でもよく上演される名曲。

源頼光の家来渡辺の綱は、主人の代わりに維仲卿の姫君へ恋文を届けに出かけた。正月のころから悪鬼が出るというので、往来の人もないが、そこは恋の道。途中の用心にと髭切の太刀を拝借したのは武門の誉れであった。卯の花咲く四月、月の照る帰り道、早くお返事をと道を急いで、ここ一条戻り橋まで来かかると、そこに一人の若い女性が困っているようす。きいてみると五条へ帰るといふ。連れ立って歩くうち、疲れただろうと一休みして問うと、女性の父は扇折、幼い時から舞を稽古しているというので、綱は舞を所望する。舞い終って話のうち、女性は綱を知っている。それは妖術であろうと見破ると、女性は鬼の本性をあらわし、綱の襟髪をつかんで引きずりあげる。髭切の太刀でその腕を切り取ったという筋。

鬼の腕を切り取るのは、能でも長唄でも羅生門ということになっているが、ここでは一条戻橋というのが特色。なおこの作品は、義太夫節にも脚色されている。

七、長唄 京鹿子娘道成寺（娘道成寺）

宝暦三年（一七五三）正月、江戸中村座の「男伊達初買曾我」第三番目に、初世中村富十郎江戸下りのお目見得狂言として初演された。前年に京都嵐三右衛門座で、ほとんど完成していたものと推定される。たぶん初世杵屋弥三郎作曲、初世杵屋作十郎捕綴であろう。

とくに説明するまでもない、長唄作品の傑作。能の「道成寺」をもとにして、「三井寺」の文句を借用し、組歌形式でまとめ、変化に富んだ作品である。

初演のときの役名は横笛であった。恋した男は滝口小四郎という旅の若衆。再演のたびにお光、お清、お露、白拍子九重、連理、桜木などと変化したのが、今は白拍子花子になっている。しかし重要なのは、一人の女性の心情を唄っているようであるが、実は、多くの女性のその時々、いろいろなさまざなな恋を唄っていることであろう。本来独立している短編の唄を、いくつか組み合わせることによって、別の情趣をかもします。一つ一つの独立した唄が、一人一人の娘の恋をあらわしている。それがまとまって、普遍的な娘の恋の表現になっているのである。

底にあるテーマは、鐘を溶かしてしまうような恋であり、ふたたびあらわれる執念の強さもあるが、華やかさと軽さで唄われるこの曲には、浄瑠璃系の同種の作品には見られない、すばらしい音楽美がみられるのである。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さりまして、ありがとうございます。ございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御観賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も、同じここ朝日生命ホールで、三月十一日(土)に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいませよう。お願い申し上げます。今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合せてお願い申し上げます。